

# 経済学におけるイデオロギーとリアリティー

鈴木 岳\*

2021年 5月

## 目次

1 序論：アルチュセールのテーゼ	1
2 『天文学史』の科学認識論	2
3 労働価値説のイデオロギー性	10
4 結論：経済学におけるイデオロギーとリアリティー	15

## 1 序論：アルチュセールのテーゼ

本稿において我々は経済学におけるリアリティー（現実性）についてイデオロギーの側面から論じる。イデオロギーの考えはもちろんマルクス [8] によって始められ、アルチュセール [1, 2, 3] によって深められた。アルチュセールによれば、人間は誰も自分のイデオロギーの「中で」自然にかつ無自覚に暮らしており、言ってみればイデオロギーとはそれぞれの社会において形成されている「暗黙の合意」であり「当たり前の常識」、更に言えば「自明の真理」として存在している。それはまるで空気のようなもので、人間にとって必要不可欠であると同時に（大気圧を測定すれば分る通り）それは巨大な重さを持つにも関わらず人間は普段全くそれを気に留めることはない、そうしたものである。彼はイデオロギーについて三つのマルクス主義的テーゼを提出した。

- (1) それぞれのイデオロギーは固有のプロブレマティック（問題系）によって内的に統一され、またその意味を変化させることなしには一つの要素も取り出せないような、現実的な全体と考えられる。
- (2) この全体の、つまり或る特定のイデオロギー（ここでは一個人の思想）の意味は、そのイデオロギーとは異なった真理との関係にはではなく、現存するイデオロギーの場、及びそれを支えそこに反映する社会問題と社会構造との関係に依存する。[そして] 特

---

\* 明治学院大学経済学部

定のイデオロギーの発展の意味は、この発展とその真理と見なされるその起源あるいは終結点との関係にではなく、この発展における特定のイデオロギーの変化と、イデオロギーの場及びそれを支える社会問題や社会関係の変化との間に現存する関係に依存する。

- (3) 特定のイデオロギーの発展の原動力は、従って、イデオロギーそれ自身の内部に存在するのではなく、その外部、特定のイデオロギーのこちら側、つまり具体的な個人としてのイデオロギーの作者の中にあり、更には個人と歴史を結ぶ複雑なつながりに応じて個人の発展の中に反映される実質的な歴史の中に存在する（強調は全てアルチュセール） [1, pp. 95-6]。

我々は基本的にこれらのテーゼを擁護し、若干の補足・修正を行った上で、経済学（社会科学）と現実性との関係についての幾らかの教訓を得ようと思う。

次節では先ず始めに科学的認識についてのアルチュセールの考え、即ち彼による一般性 I~III の考えを紹介する。彼によれば、科学的認識とは一般性 I というイデオロギーを一般性 III という科学的概念に変形する理論的实践または生産活動である。これによって彼は、科学的認識とはそもそもイデオロギーから引き出され、その結果もまた概念であり、それに至る推論の過程は全て（現実とは厳密に区別される）認識主体の理論的实践（すなわち認識）の中で行われる、と主張する<sup>1</sup>。我々は、これらの考えがスミスの『天文学説史』によって完全に支持されることを確かめる。同時にこの論文でスミスが、「イデオロギー」という言葉こそ用いないものの、科学的認識の成立に際してイデオロギーの交代（克服）が伴うことを明確に自覚していた事実を確認した後、第3節では彼の価値理論を検討する。そこでニュートンによる科学的天文学が当時の形而上学的（思弁的）イデオロギーを克服して成立したことを明晰に理解していたスミス自身の創設した社会科学理論、すなわち『国富論』の経済学の基礎概念たる、いわゆる「（労働）価値」の考えが未だイデオロギーの水準に留まっていることを彼自身の説明を検討することによって確認する。最終節では以上を踏まえて経済学における現実性とイデオロギー性との関係について幾つかの考察を引き出す。

## 2 『天文学史』の科学認識論

本節では科学的認識の一般的性格を特徴付けるアルチュセールの認識図式を援用して、理論的实践とイデオロギーとの関係を論ずる。そして驚くべきことには、この認識は既に A. スミスの『天文学史』によって先取りされていたことを見るだろう。アルチュセールによれば、科学的認識とは決して個別的な事実あるいは実在といった、いわゆる現実から理論を導出したり法則を抽出したりする行為ではない。それは常に必ず何らかの観念に働きかけて、それを科学的概念に転換（変形）する一種の生産活動（実践）である。その科学分野が未だ十分な発展を遂げていない段階では、出発点の観念は未だイデオロギーに留まることもある。彼はこれを一般性 I と呼び、結果として得られた科学的概念を一般

<sup>1</sup> 彼はこの主張を認識に関する唯物論的テーゼと呼ぶ。

性 III と呼ぶ。そして一般性 I と一般性 III は質的な不連続という性格によって区別される [1, p.291] ことから、彼はこの転換をバシユールから借りた「認識論的切断」の名称で呼ぶことは良く知られている。

この最初の一般性（それを〈一般性 I〉<sup>2</sup>と呼ぶことにする）が、原材料を形づくり、科学の理論的实践によってこの原材料は種差化された「概念」つまり認識という、もう一つ別の「具体的な」一般性（それを〈一般性 III〉と呼ぶことにする）へと変えられる。ところでその場合、〈一般性 I〉、つまり科学の仕事が働きかける理論上の原材料とは何であろうか？ 経験論や感覚論におけるイデオロギー的幻想（「素朴な」、単なる「間違い」というのでは無く、イデオロギーとして必然的で基礎付けられた幻想）とは反対に、科学は決して実在しているもの --- 純粋な直接性と単一性（「感覚」や「個人」）を本質とするところの --- に働きかけない。科学は常に「一般的なもの」に --- それが事実の形式を帯びている時でも --- 働きかける。[...] 既に創りだされた或る科学が発展していく場合には、科学が働きかける対象は、未だイデオロギーに属する概念にしる、科学に属する「事実」にしる、既に科学的に練り上げられているが科学の前段階に属する概念（第 3 の一般性の原型）にしる、そうしたもので構成された原材料 [一般性 I] である。だから、この〈一般性 I〉を〈一般性 III（認識）〉へ転化させることによって、科学は作用し生産することになる [1, p.317]。

この理論的实践の手段として用いられるものもまた一種の概念及びそのシステムであって、その時々科学者（または哲学的理論家）が利用可能な、相互に多少とも矛盾しているかもしれない、その時代までに達成されていた〈一般性 II〉と呼ばれる理論的（哲学的）成果である。

[...] 一般にどんな転化（どんな実践）も、一定の生産手段の働きによる、原材料の、生産物への転化を予想している。科学の理論的实践の場合、その生産手段に対応するところの、契機、水準、審級とは何であろうか？ それは、これらの生産手段の中で、仮に人間を考慮に入れない場合、我々が〈一般性 II〉と呼ぶところのものである。それは、一群の概念によって構成されているが、その概念の多少とも矛盾する統一体が、一定の時期（歴史的な）における科学の「理論」を構成する。[...] 理論的实践は、〈一般性 I〉に対する〈一般性 II〉の仕事によって、〈一般性 III〉を生み出す [理論的实践である] [1, pp.317-9]。

我々は取り合えずこの図式を受け入れておくことにする<sup>3</sup>。しかしこの図式は少なくとも天文学の発展の歴史において生じた諸事実の観察と整合的である。我々はそれをスミス

<sup>2</sup> 括弧〈〉で括ってある理由は、原文のこの言葉が、大文字で始まっていることを示すためである。この著書の中で、大文字で始まる〈理論〉によって、マルクス主義哲学を、普通の「理論」という言葉でその他の（自由主義、実証主義、経験論などの彼によれば）「イデオロギー的な」哲学を指す旨を断っている [1, p.62]。

<sup>3</sup> 但しこの図式が当てはまるためには、その科学理論が既に一定の段階にまで達している必要があると思われる。天文学を創設した原初のイタリア学派の自然哲学者たち（本文参照）の眼は恐らく天体の運行という事実そのものに注がれていたであろうと推測される。また次節で見るとおり、スミスが古典派経済学を創始した際にも彼は当時のスコットランド（ヨーロッパ各地）で彼が実際に（現実に！）目の当たりにしていた諸事実を基にして議論を行っている。これらのことを踏まえると、我々は、ある科学が創設される際の一般性 I には諸事実の観察もまた含まれると言うべきかもしれない（アルチュセール自身は、事実の形式を帯びているときにも科学は常

の論文『天文学史』によって確かめよう。この論文でスミスは、古代ギリシャ(アテナイ)の自然哲学者以前にイタリア学派によって唱えられていた天文学説から書き起こし、ある一つの主導的な理論が現れ、それがいかにして他の新しい理論に取って変わられるのかを詳しく観察・分析している。出発点での課題は太陽、月及び恒星とは著しく異なった動きをする惑星の運動をどのように理解するかであった<sup>4</sup>。

全ての自然の出来事の中で天体現象は、その壮大さと美しさによって、人類の好奇心の最も普遍的な対象である。天空を最も散漫な注意力を以ってしか見渡さなかった人々も必ず、太陽、月、星という3種類の異なる対象を識別した。このうちで最後の星[恒星]は、何時も同じ場所に互いに同じ距離を保ちながら現れ、毎日地球の周囲を天の両極から天の赤道へと次第に広がる平行な円周軌道を回転しているように見えたので、自然とそれらは多くの宝石のように大空の凹面に固着し、その固体[天球面]の日々の回転で運ばれているという徴候を全て示していると考えられた。[...]より注意して見渡すと、星の中にその運動が他のものよりも変化しやすく非一様な、他の諸天体に対する位置を変化させるものが観察された。それらは大抵は東に向かって動いているが、時には静止しているようにさえ見えた。これらの5個の星は惑星という名前で区別され、個々の呼称は土星、木星、火星、金星、水星である。それらは太陽や月と同様、恒星の運動に伴って東から西への運動をするが、それと同時に大抵は西から東へのそれら自身の運動をもするように見える。だからそれら惑星は、太陽と月と同じように、それぞれ固体性で透明な凹面の球体の内側に固着していると理解された。その球体は、外側の天空の回転と殆ど正反対にそれ自身が回転すると同時に外側の天空よりも激しくより速い運動も行っているのであった[10, pp.35-7]。

しかし天体のより詳しい観測によって次第にこの原初の素朴な体系の不十分さが露呈されていった後に、エウドクソスは惑星自身が恒星天球とは別にそれぞれの天球持つという仮説によって理論を修復した。この結果エウドクソスの体系では天球の数は27個になった。しかしより精密な観測結果を説明するためには、必要な天球の数をどんどん増やして行かざるを得なかった。

エウドクソスより年は幾分若かったが同時代人であったカリッポスは彼がそれらの天体に発見した非常に様々の運動を結合するには、その数でも不十分であることに気付きその結果それを34に増やした。アリストテレスは一層注意深い観察に基づいてそれらの天体全部でも十分でないことに気付き、そのため更

に「一般的なもの」に働きかける、と述べているが)。あれらの科学の創設時の一般性 I に働きかけた一般性 II は、球などの初等的な幾何学的図形(イタリア学派)あるいは自然言語(スミス)であったろうが、この段階での理論的結論一般性 III は未だ「科学的」認識としては素朴なものであり、それらは次世代の探求者にとっての一般性 I あるいは一般性 II として歴史的に貢献するのだと考えられる(ちなみにアルチュセール自身は、この図式を彼が科学と見なすマルクスの史的唯物論を想定しつつ提出したのである)。

<sup>4</sup> 解決すべき理論的問題が議論の出発点に存在したということが、この天文学と他の様々な宗教や哲学に見られる思弁的(世界観的)宇宙論とを分ける点であったのかもしれない。言い換えれば、出発点での観察や認識が単なる形而上学的思弁に終わらずに科学的理論として成長していくか否かは、それが解決すべき真性の理論的問題を含んでいるか否かによるのであり、その意味では未解決の問題こそが理論を進展させる原動力なのである。

に 22 を追加したのでその数は 56 に増加した。後の観察者達は、天空に更に新しい運動と新しい偏差を発見した。そのために更に新しい天球が体系に追加され恒星天球の上にまで幾つか配置された。こうして 16 世紀にプラトンとアリストテレスの雄弁に魅せられて、出来事 [現象] に正確には一致していないがそれ自身は完璧に美しい彼等の体系の規則性と調和に魅せられたフラカストーロが、長い間プトレマイオスとヒッパルコスに席を譲っていたこの古代の天文学を復活させようと努力した時彼は、天球の数を 72 に増加させる必要があると思った。しかしこの全てでもやはり十分ではなかった。諸現象を一様でまとまったものとするために考案されたこの体系は、今やそれらの現象自身と同じ位に入り組んだものとなってしまった [10, p.42]。

同心天球の数を機械的に増やすことによって全ての天体現象を説明しようとする試みには限界があることが今や明らかになった。困難を克服するべく、離心天球と周点円という概念を備えた理論体系がアポロニウスによって提唱された。それは後にヒッパルコスによって補足され、プトレマイオスによって大成された。周知の通り、ローマ帝国の崩壊後プトレマイオスの理論はアラビア圏において研究され、ヨーロッパ中世のスコラ学者達はアラビア語訳されたプトレマイオス体系をアリストテレス哲学と共に受容し、研究が続けられた。しかしプトレマイオスの理論を以ってしても天体の運行を完全に説明する事は出来なかったものであり、歴史はいよいよコペルニクスの登場を迎える。スミスが特に注目するのはコペルニクスの動機とそのアイディアの歴史的な起源である。

コペルニクスは、天体現象をプトレマイオスの体系よりも正確であるとともに単純な方法で結合する新しい体系を構想しはじめた。[...] プトレマイオスの体系の] 中でも最も彼に不満だったのは均等円という考えであった。それは [...] 一様であるべき] 諸天体の運動に真の不等性を導き入れてしまった。[...] そこで彼は、諸天体がアリストテレスやヒッパルコスが配置したのとは異なる序列で配列されていると想定することによって、この求められた一様性がそれらの運動に与えられないかどうかを考察し始めた。彼はこの配列を発見するために、同じ目的で古代の人々が創案した他の全ての仮説について我々に伝えられはしたが余り知られていない伝承の全てを吟味した。そしてプタルコスの著書の中に、旧ピュタゴラス派のある人々が、車輪がその軸の回りを回転するのと同様に地球が宇宙の中心で回転していると説明しているのを発見した。また同派の別の人々が、地球を中心から外して、星が中心火の回りを回転するように黄道を回転していると説明しているのを発見した。彼らはこの中心火で太陽を意味しているのだと、彼は考えた。この解釈はひどく間違っていたが、[しかしともかくにも] その解釈に基づいてそのような仮説がどうすれば諸現象に一致させられ得るか、彼は考え始めたらしい [10, pp.57-8]。

ここまでの天文学の歴史を振り返ると、ヒッパルコスやプトレマイオスを初めとするコペルニクス以前の天文学者たちは、彼らが先行する世代から受け継いだ天球モデルを一般

性 I として、それに対して同時代のより精密な観測データ<sup>5</sup>という一般性 II を働かせた結果、彼ら自身のモデルを一般性 III として産出したと見ることができる。従ってここまでの経過は確かにアルチュセールの図式の下で理解される。そしてコペルニクスの成功の大きな理由は、彼が、先行する世代にとっての最優先事項であった理論値と観測データとのより良い一致という目標よりもむしろ、旧ピュタゴラス学派の哲学者たちのアイディアを一般性 II として優先させたことにあると考えられる<sup>6</sup>。

彼をそのように仕向けた動機は恐らく、真なる理論は単純な美しい理論であるはずだという信念であろう。それによって彼は、本来一様であるべきと彼の考える諸天体の運動に真の不等性をもたらした均等円の考えに不審を抱いたものと思われる。もちろんここでもコペルニクスの精神の眼（理性）が注がれたのは天体の運行そのもの（いわゆる「生の現実」）ではなく、天体の運行を抽象的に表象する理論モデル、即ちある種の観念的一般性である。つまりコペルニクス天文学（地動説）の生誕に際してもまた、プトレマイオス天文学という一般性 I に古代の自然哲学者のアイディアという一般性 II（しかも誤解に基づいて！）が働きかけてコペルニクスの理論という一般性 III が生産された、というアルチュセールの認識図式が成り立つことを確かめることが出来る。

興味深いことは、コペルニクス体系がプトレマイオスのそれよりも観測データにより良く適合することが明らかとなった後も、プトレマイオスへの支持がしばらく続いていたということである<sup>7</sup>。しかしそうは言っても天文学者達が何時までもこの理論の持つ魅力を見捨てる事は出来なかった。彼等にとっては、実験データを説明するほぼ同等な能力を持つ二つの競合する理論があればより単純で美しい理論を選ぶ事は（たとえそれが素朴な感覚的印象とは背反しても）自然なのである。ところがスミスによれば、哲学者達の偏見（イデオロギー）は科学者達のそれよりも強固であって彼らは天文学者（科学者）達よりも頑なにこの理論を拒んだということである。そして一部の科学者の中にも最後までこの理論を拒否する者が居たのであった。

しかし、それ[コペルニクス理論]は天文学者だけにしか受け容れられなかったし、そのことは疑う余地がない。他の全ての科学の学識者はそれを大衆と同じ軽蔑を以て遇し続けた。天文学者達ですら、その価値に関して意見が分かれた。そして彼等の多くは既存の自然哲学の体系に矛盾するだけでなく、単に天文学的に考察しても幾つかの困難に苦しむように見える学説を拒絶した [10, p.65]。

彼らが（我々の眼には）これほどまでも頑なに態度で地動説を拒んだのは、アルチュセールのテーゼ (1)：

それぞれのイデオロギーは固有のプロブレマティック（問題系）によって内的

<sup>5</sup> 科学の観測データとは確かに事実の観測から得られるのだが、それ自身はもはや「生の現実」ではなく、ある統一的な観点の下で集められた事実の集積としての理論的な構成物であり、それ故アルチュセールの言う「一般性」の範疇に属する対象である。

<sup>6</sup> 理論のいわゆる「パラダイム転換」はデータとのより良い一致を追求した結果として生ずるのではない、という T. クーン [6] の議論を彷彿とさせる。

<sup>7</sup> スミスのここでの議論は、「科学理論が観測（実験）データによって検証される」と呼ばれる事柄を巡る、特に 20 世紀の戦後の（科学）哲学者達がしきりに問題とするようになった議論（いわゆる「観察の理論負荷性」の議論）を先取りしているように見える。

に統一され、またその意味を変化させることなしには一つの要素も取り出せないような、現実的な全体と考えられる

を通じて理解される。彼らのプロブレマティックは当然 17 世紀ヨーロッパのキリスト教神学の教義によって統一されていたのである<sup>8</sup>。実際反対論者たちは、単に頑なに問答無用の態度で新しい考えを拒んだのではない。彼等はコペルニクスへの彼等なりの筋の通った反対論を持っていたし、それはコペルニクス支持者によってすらも、当時決定的な反論が困難と感じられたのであった。

この [コペルニクスの] 仮説の敵対者たちは、その反論を強化するためにこの運動の速度を骨折って計算し、次のように論じた。地球の円周は 23,000 マイル [=36,800km] 以上と計算されている。だから地球が毎日地軸の回りを回転していると想定すると、赤道付近の全ての点は 1 日に 23,000 マイル以上の距離を通過することになる。従って 1 時間に 1,000 マイル近く、1 分間にほぼ 16 マイル [=25.6km] でこれは砲弾よりも速く、音速すら及ばない速さの運動である。その周期的回転の速度は日々の回転の速度よりも一層速い。それだからこんなに重たい物体 [地球] にそんなに恐ろしい運動が自然によって付与されているなどということ、想像力が一体どのようにして思い描き得るだろうか [10, p.66]。

コペルニクスは、アリストテレスやヒッパルコス等の天動説も、地球より更に巨大な天球に対して自分が地球に対して仮定した運動よりももっと急速な日周運動を与えているのではないかと反論したが無駄であった。反対論者たちは、天球の領域で生じる現象は地球上の現象とは「別の世界」での出来事であり、我々はそれを実際には (地球の出来事のように) 知らないのだから両者を単純に比較することは出来ない、と応じた。

たしかにアリストテレスとヒッパルコスの体系は諸天体の日周運動に対してコペルニクスが地球に与えた恐ろしい運動に比してさえ無限に早い速度を与えた。しかし彼らはそれらの物体を地球表面の我々の良く知っているどのようなものとも全く異なる種類の対象であると考えていた。そのためどのようなそうした運動が自然的であるとするのに困難はなかった [10, p.68]。

17 世紀ヨーロッパの知識人社会がもちろんキリスト教神学のイデオロギーによって支配されていたことを前提すれば、この論争の経緯は先のアルチュセールのテーゼ (2) :

特定のイデオロギーの意味は、そのイデオロギーとは異なった真理との関係ではなく、現存するイデオロギーの場、及びそれを支えそこに反映する社会問題と社会構造との関係に依存する

から理解することができるだろう。天動説から地動説への移行を、現代的な宇宙観すなわち均質かつ等方向的な時空の中での単なる (地球を中心とする座標系から太陽を中心とす

<sup>8</sup> しかしスミス自身はそうは言っていないことに注意しよう。彼はコペルニクスの体系は「既存の自然哲学の体系に矛盾するだけでなく、単に天文学的に考察しても幾つかの困難に苦しむように見える学説」であるために反対されたと述べている。我々はこの論文の著者が A. スミスという一人の 18 世紀人であることを忘れてはならない。つまり彼には当時の知識人たちが、そして自分自身もまた、キリスト教イデオロギーの中に住んでいることがはっきりとは見えていないのである。この問題については最終節で論じる。

る座標系への)座標変換と見なしてはならない。この科学史上の大事件が我々にとって一見そのように見えるのは、まさにこれを現代の合理主義的イデオロギーから眺めるときの「見かけ」に過ぎない。真実には、ここに生じたことはまさにアルチュセールの意味でのプロブレマティック(問題系)の移動であり、イデオロギーの転換である。そしてコペルニクスという一人の自然哲学者のまさに超人的な力技によってこのイデオロギーの大転換がなしとげられたことは、アルチュセールのテーゼ(3)：

特定のイデオロギーの発展の原動力は、イデオロギーそれ自身の内部に存在するのではなく、具体的な個人としてのイデオロギーの作者の中にあり、更には個人と歴史を結ぶ複雑なつながりに応じて個人の発展の中に反映される実質的な歴史の中に存在する

を裏付ける出来事であると言えるだろう。

その後ガリレイが望遠鏡を用いて発見した木星の衛星は、全ての惑星を太陽の周りを公転させながら月のみは地球の回りを回転するとしたコペルニクス体系の「美的欠陥」を補う強力な例証を与えた。この後ドイツの天文学者ケプラーによって、惑星の軌道が完全な円ではなく太陽を焦点とする楕円であることを含む、いわゆる惑星の運航に関する「ケプラーの3法則」の発見があったことが詳しく説明されている [pp.76-84]。そこで

今や、コペルニクスの体系を困惑させるのは、地球や他の諸惑星のような計り知れず重い物体が太陽の回りを、そのような信じ難い速度で回転すると考える時に想像力が感じる困難だけであった。「感覚の偏見にも関わらずこの円運動が諸惑星には自然であってそれは石が地面に落下するのが自然であるのと同様らしい」とコペルニクスが弁明しても無駄であった [10, pp.84-5]。

現代の観点からするとコペルニクスの説明は「正しい」のだが、当時は明らかにそれは理論的裏づけを伴わない単なる推測に過ぎなかった。

ところでケプラーは惑星が何故、コペルニクスが先ず定性的に明らかにし自分がさらにその定量的な規定に成功した、太陽を焦点とする楕円運動を行うのかを理解するべくその説明に乗り出した。彼によれば、宇宙にはある生命的・非物質的力能が存在し、それは太陽から周囲の空間へと放出され、太陽の軸の周りの回転と共に動き回り、諸惑星を捉えて諸惑星の重さと静止への強い傾向[慣性]にも拘わらずそれらを無理矢理太陽系の中心の回りを回転させる、というのである [10, p.85]。

デカルトはケプラーの「非物質的な力」に(もちろん)満足せず、彼なりの「科学的な」説明に乗り出した。それによれば、無限の空間全体は物質で充満しており(彼にとっては物質と延長は同一であり従って、真空は有り得なかった)、その物質の無限の広がりは無数の非常に小さな立方体に分割され、それらは全て自身の回りを旋回しながら二つの異なる要素を生み出す原因となる。第一の要素は角ばった部分からなり、それらは相互の摩擦で小さく磨り潰されていく、物質の最も微細な可動的部分[粒子]である。第二の要素は第一の要素から生ずる小さな球体で、この小球体の間の隙間は第一要素の粒子で埋まっている。これらの物質が大小無数の渦動つまり円形の流れを生み出す、云々といったものである [10, pp.86-7]。

我々にとっては全く謎めいたケプラーやデカルトのこれらの宇宙論の詳細に関するスミスの解説を、ここで忠実に再現する事はできない。確かに我々は後知恵によってケプラーやデカルトの失敗の原因を容易に指摘することができる。つまりそれは「生命的（非物質的）な力」にせよ「微小物質」にせよ、その本質において抽象的かつ不可視である重力という物理的作用（働き）に対して、想像力に訴えてイメージの描けるこうした何らかの具体的対象を仮構したことであった<sup>9</sup>。いずれにしても、こうした眼も当てられないイデオロギー的混乱を経て、完全な定量的理論がもちろんニュートンによって与えられた。スミスはニュートン理論の要点を次のように正確かつ簡潔に説明している。

我々は、経験から地表近くの引力がどのようなものであるかを知っている。つまりそれは、落下の最初の1秒間に物体を約15パリフィート [約490cm] 落下させる力である。月は、地球の表面から地球の半径の約60倍の距離にある。従っても、引力が距離の2乗に反比例すると想定されたならば、月面上の物体は地球に向かってその物体が地表近くでは1秒間で落下するのと同じ距離を1分=60秒で落下するだろう<sup>10</sup>。ところで、月が1分間に描く弧は、観察によればその軌道に対して引いた接線から約15パリフィートずれる [地球に向かって曲がる]。従って、月は絶えずそれだけ地球に向かって落下していると考えることが出来る [10, p.94]。

ニュートンは「重力（引力）とは何か」という哲学的な問いを一先ずおいて、それが「普遍的（universal）であり（質量の積に比例し）距離の平方に反比例する」という重力の抽象的な性質、つまり重力の作用する物体間の関係性を見抜くことによって、現実の観察を極めて良く再現する定量的な理論の構成に成功すると同時に「天空と地上とは異なる法則に服している」というイデオロギーを完全に払拭したのであった。そしてアルチュセールの認識図式の観点からは、コペルニクス理論を一般性 I として、ニュートン自身の創始になる力学、万有引力法則そして無限小計算などの一般性 II が働いた結果、一般性 III としての彼の天文学（惑星運行）の理論が生産されたと言えるだろう。この理論の目覚ましい成果は、実証的にはスミスによって指摘されている、月の運行に関する観測結果の正確な再現と、理論的にはケプラーの3法則の導出である。

論文『天文学史』はニュートン理論を讃えつつ次のように締め括られる。

[ニュートンの体系では] その全ての諸部分は、他のどの哲学的仮説の諸部分よりも厳密に結合されている。彼の原理によって引力の普遍性とそれが距離の平方に反比例することを認めれば、彼がそれによって結び付ける全ての現象は必

<sup>9</sup> ニュートンの有名な言葉「私は仮説を作らない」は、彼の理論設定がこうした空想的な対象を想定していない、という意味ではないだろうか。しかしこうした発想は実は、いかなる科学理論においてもその創設期においては通例として見られるのであって、我々は次節でスミスの市場価値の理論もまた、市場価値の概念を労働量に等置するという似たタイプのイデオロギー的仮構を行っていることを目撃するだろう。

<sup>10</sup> 現代的な（解析的な）表現をすれば（ニュートンは解析学では無く幾何学的に表現した）以下のように証明される。地表面の重力加速度  $g$  は、万有引力法則から  $g = GM/R^2 = 980\text{cm/sec}^2$  で与えられる。ここに  $G$  は万有引力定数、 $M$  は地球の質量、 $R$  は地球の半径である。質量  $m$  の自由落下する物体の  $t$  秒後の落下距離を  $x(t)$  とすれば運動方程式は  $mg = m \frac{d^2}{dt^2} x(t)$  だから、初期条件  $\dot{x}(0) = 0$  の下に積分して  $\dot{x}(t) = gt$ 、もう一度  $x(0) = 0$  の初期条件で積分すれば  $x(t) = (1/2)gt^2$ 、これより1秒後に物体は  $x(1) = (1/2)g = 490\text{cm}$  落下することが分る。月面での重力加速度を  $60^{-2}g$  として、月面での解  $x(t) = (1/2)60^{-2}gt^2$  に  $t = 60$  を代入すれば、 $x(60) = (1/2)60^{-2}g60^2 = (1/2)g = 490\text{cm}$  を得る。

然的な帰結として導かれる。それらの関連は他の大抵の体系のその様に単なる一般的でゆるい関連ではない。[...] 従って以下のことはそれ程驚くには当たらないのである。即ちその体系が人類の一般的で全面的な是認を獲得したということ、そして今や想像上で天空の出来事を結合する一つの企てとしてではなく、人類によってこれまでになされた最も偉大な発見、即ち我々が毎日その現実性を経験している一つの主要な事実によって全てが密接に結合されている、最も重要で最も崇高な諸原理の、広大な鎖の発見と見なされていることだ [10, pp.101-3]。

再びアルチュセールのテーゼ (2) を思い出せば、そのようにして当時の支配的なイデオロギーであった基督教の教義とアリストテレスの哲学に基づく神学的イデオロギーを覆したニュートン理論の理性主義的 (合理的) イデオロギーは、当時のヨーロッパにおける教会を支配的勢力とする社会構造の変革を促したと言えるかもしれない。そして我々の住む現代社会は、まさにこの合理主義 (科学主義) 的イデオロギーに意味を与え、また逆にそのイデオロギーによって支配される構造を持つ社会なのだと思う。

### 3 労働価値説のイデオロギー性

『国富論』においてスミスは、その後新古典派が現れるまで D. リカードや K. マルクス、J.S. ミルらを含む著名な理論家を永きに渡って支配する「二種類の価値」の定義を有名な「価値のパラドックス」とともに与えた。

注意すべきは、価値という言葉に二つの異なる意味があり、時にはある特定の物の効用を表し、時にはその物の所有がもたらす他の品物を購買する力を表すということである。一方は「使用価値」、他方は「交換価値」と呼んで良いだろう。最大の使用価値を持つ物が交換価値を殆どあるいは全く持たないことがしばしばあり、逆に最大の交換価値を持つ物が使用価値を殆どあるいは全く持たないことがしばしばある。水ほど有用な物はないが、水は殆ど何も購買しないだろうし水と交換に手に入れられる物は殆ど何も無い。逆にダイヤモンドは殆ど何の使用価値も持たないが、しばしばそれと交換に他の物を極めて多量に手に入れることが出来る [9, pp.60-1]。

経済学は市場において決定される (市場) 価格をその分析の対象とする。従って二つの価値概念のうちで経済学にとってより重要なのは明らかに上に言われている交換価値の方である。そしてスミスも明確に「交換価値」を彼の経済学にとっての研究対象であるとして、自身の基本問題を次のように定式化している。

第一に、この交換価値の真の尺度は何か。或いは全ての商品の真の価格は何であるのか。

第二に、この真の価格を構成し、或いは形成している様々な部分は何であるのか [9, p.61]。

初めの問題でスミスは、交換価値の「真の尺度」を（商品の）「真の価格（≠市場価格）」と同一視してそれが「何であるのか」と問い、二番目の問題でその「真の価格」は「いかなる部分から成り立っているのか」という問いを提起している。その後の200年に及び経済学の発展は我々に、そのような「真の価格」など存在しないこと、この問題は恐らく不適切に、はっきり言えば誤って立てられた問いであることを教えてくれるのである。すなわち経済学において意味を持つ価値の概念とは、市場モデルという表象装置において成立する「均衡価格」に過ぎない。そしてそれによって認識出来ることは、価格という概念は市場で取引される諸商品相互の「関係性」において成立する、従って抽象的な概念だということである。つまり現代の経済学は、価値（価格）に対して商品自体に想定されるような（労働などの）何らかの「実体性」を求めても無駄であることを教えるのであるが、スミスは未だこの事を認識していなかったことが以下のように「国富論」の叙述から見て取れる。実際スミスはとりあえず、労働が交換価値の「真の尺度」である、と宣言してみせる。

[...] ある商品の価値は、その商品を所有しかつそれを自分で使用するつもりも消費するつもりもなく他の商品と交換しようと思っている人にとっては、それによって彼が購買または支配し得る労働の量に等しい。従って労働が全ての商品の交換価値の真の尺度なのである<sup>11</sup> [9, p.63]。

これは説明になっていない。誰しも落ち着いて考えてみれば、上の文章の中の「労働」と言う語句を他の任意の商品の名前に置き換えることが出来ることに気づくはずである。さらにはこうした特定の財を「価値の尺度」として選び出すと、この労働という財の価値は何でありそれは何によって測られるのか、という困難な問いが持ち上がるだろう<sup>12</sup>。このような間に合わせの説明は直ちに破綻する。

しかし労働が全ての商品の交換価値の真の尺度であるとはいえ、それらの商品の価値が普通に評価されるのは労働によってではない。二つの異なる労働量の

<sup>11</sup> このいわゆる「労働価値説」の思想的起源（の少なくとも一つ）は、もしかしたら J. ロックにあるのかも知れない。ロックは『市民統治二論』で次のように述べている。

「たとえ、大地と全ての下級の被造物とが [神による被造物としての] 万人の共有物であるとしても、人は誰でも自分自身の身体に対する固有権を持つ。これについては、本人以外の誰もいかなる権利も持たない。彼の身体の労働と手の働きとは彼に固有のものであると言って良い。従って自然が供給し、自然が残しておいたものから彼が取り出すものは何であれ、彼がそれに自分の労働を混合し、それに彼自身のものである何ものかを加えたのであって、そのことによりそれを彼自身の所有物とするのであるそれは自然が設定した状態から彼によって取り出されたものであるから、それには彼の労働によって他人の共有権を排除する何かが付与されたことになる [7, 後編・第 27 段落、強調は全てロック自身による]。」

スミスは当然ロックのこの著作を良く知っていたはずである。スミスは引用の最後の「彼の労働によって他人の共有権を排除する何か」を、それが今や身に帯びることとなった「価値」と解釈したのではないか、という推測はある程度もっともらしいだろう。なお引用中の「固有権」は通常は「所有権」と訳される property の訳語として、邦訳者の加藤教授が特にロックの翻訳に際して考案されたものである。

<sup>12</sup> アルチュセールはマルクスの『資本論』第 I 巻から以下の文章を引用し、マルクスの古典派経済学批判を称揚する。「古典派経済学は、予め吟味することなしに日常生活から〈労働の価格〉の範疇を借りてきた後にこの価格がどう決定されるのかを自問した。他の全ての商品と同様に、労働もまた需要と供給が特定量の上方または下方への市場価格の変動以外のものは説明しないことに、古典派経済学は直ちに気づいた。[...] 需給の均衡状態では、労働の価格はもはや需給の働きには依存せず、従ってあなたも需給が存在していなかったかのように規定されなくてはならない。[...] 古典派経済学はこのような仕方、労働の偶然的価格からその現実的価値まで遡ったと信じた。ついでこの価値を、労働者の維持と再生産に必要な生活手段の価値によって規定した。」しかし少なくともスミスは労働の価値を「労働者の維持と再生産に必要な生活手段の価値」として定義してはいない。恐らく彼はこうした循環をはらんだ定義が招くであろう理論的困難を予感していたのであろう。

割合を確かめることはしばしば困難である。[...] 大部分の人々にとって、労働の量よりもある他の商品の量の方が意味が良くわかる。一方ははっきりした手で触れることの出来る物体であるが、他方は抽象的な観念であってそれを十分に理解し得るにしても、前者ほどには自然かつ明白ではない [9, pp.65-6]。

それで、結局価値の尺度として当時の（現在でも）通念である貨幣に舞い戻ってしまう。

しかし物々交換が終わって貨幣が共通の用具になってしまうと、全ての個々の商品は他のどんな商品と交換されるよりも貨幣と交換される方が多い。[...] つまりどんな商品でもその交換価値はそれと交換に得られる労働の量や或いは或いは他の何らかの商品の量によって評価されるよりも、貨幣の量によって評価されることの方が多いということになる [9, pp.66-7]。

だがこれでは結局、「真の価値尺度は何か」と言う初めの問題は全く解けていない。何故ならスミスは貨幣の鑄造に用いられる金銀の「価値」がその時々で変化することを認めざるを得ないからである。

ところが金銀は他の全ての商品と同じようにその価値が変動し時によって安価だったり高価だったりする。つまり時によって購買し易かったりしにくかったりする [9, p.67]。

そしてとうとうスミスは（スミスともあろうものが）次のように言い出す始末である。

[...] それ自体の価値が絶えず変動している商品は決して他の商品の価値の正確な尺度では有り得ない。等しい量の労働は何時でも何処でも労働者にとっては等しい価値であると言って良いだろう。健康と体力と気力が普通の状態であり、熟練と腕前が普通の程度であれば彼は常に同じ分量の安楽と自由と幸福を放棄しなければならない。彼が支払う価格は、それと引き換えに彼が受け取る品物の量がどれ程であろうとも常に同一であるに違いない。なるほどこの価格が購買するこれらの品物の量は時によって多かったり少なかったりするだろうが、しかし変動するのは品物の価値であって、品物を購入する労働の価値ではない [9, p.68]。

これでは全くの論点先取りである。ここでスミスは労働が価値の真の尺度であると、説明しているのでは無く、単に言い張っているに過ぎない。彼は「変動するのは品物の価値であって、品物を購入する労働の価値ではない」ことを「労働の価値」の定義を与えることなく<sup>13</sup>独断的に主張しているが、問題はなぜ「品物の価値」は変動するのに「労働の価値」は不変なのか、であったはずである。しかもスミスは彼の主張を「[労働者の] 健康と体力と気力が普通の状態であり、熟練と腕前が普通の程度である」というのはなほだ曖昧な条件の下に行っているのである。

スミスの現実社会に対する広く深い観察は、（現代の我々から見れば）認識の理論的基礎があやふやな状態である彼に対して更なる問題を課すこととなる。彼は依然として労働

---

<sup>13</sup>脚注 12 を参照せよ。

こそが価値の真の尺度を体現する財であることを固く信じているのだが、上の引用から明らかな通り様々な商品や賃金、利潤、地代などの価値を表示するための財として労働は実際上必ずしも最適ではなく、その際には通常用いられる貨幣に頼らざるを得ないことを認めていた。しかし広く知られている新大陸からの多量の金・銀のヨーロッパ大陸への流入は、当時の（ヨーロッパの）誰の眼にも金・銀の「価値の下落」を引き起こしたと見られていた。

アメリカの豊富な諸鉱山の発見は、16世紀にヨーロッパの金銀の価値をそれ以前の約三分の一に引き下げた [9, p.67]。

それ故彼によれば、例えば地代のようにその契約が長期に及ぶ商品では、その価格を貨幣価値で表示するよりも穀物の量で表示した方がその「価値」の同一性をより良く保つはずである (?)。

遠く隔たった時点で等量の労働を購入するには等量の金銀、あるいは恐らく他のどんな商品によってよりも労働者の生活資料である穀物による方が等量に近いだろう。従って遠く隔たった時点では、等量の穀物の方が同一に近い実質価値をもつだろうし、それがその所有者に購買または支配させる他の人々の労働は等量に近いだろう [9, pp.71-2]。

先に「価値の（真の）尺度として労働以外のどんな財を選んでも構わないはずだ」とごく当然のように述べたが、我々にとってその主張が自明であるのは、我々が現代の完全に形式的に完備された新古典派経済学の理論モデルを持っているからである。スミスは（彼の何時もの）現実に対する鋭い観察によって、労働以外の穀物という商品もまた価値の尺度として考慮されるべきことを洞察したのだが、こうした整った理論を持たない彼はそれによって更なる混乱の中へと引き込まれて行くことになる。

しかし注意すべきことは、穀物地代の実質価値の変動は世紀から世紀にかけては貨幣地代のそれよりも遥かに小さいが、年から年への変動では遥かに大きいということである [9, p.72]。

スミスはこのように、ある商品の（交換）価値が新鉱山の発見やその年の作物の出来・不出来等々といった市場の外で生じる事柄によって影響を受けることを認めなくてはならなかったのだが、「労働は真の価値の尺度としてその価値が一定である」と主張するためには同時に、労働の価値のみがそういった市場外の出来事からの影響を免れていることを証明しなければならないはずである。しかしこれは彼の根本的な観察、即ち、分業（これ自体は新鉱山の発見や豊・不作に類比的な市場外での現象だろう）がその生産性を増大させる、という主張と矛盾するのではないのか？ 『国富論』のある一節 [9, p.23] で彼は確かに、分業が労働者の熟練、腕前、判断力を向上させる、と述べていたではないか？ それとも「労働の価値」とは、労働者の熟練、腕前、判断力などを超越したものなのか？ もしそうならばそれ程にも神秘的な「労働の価値」とは一体何物なのか？

現代的観点からすれば、新鉱山の発見や豊作によって単に金銀や農作物の供給量が増加したために価格の下落を引き起こしたのであり、それ以上でも以下でもない。何度も述べ

た通り現代の経済学では市場価格以外には意味の有る価値概念は存在しないから、これが言われ得る全てである。スミスは上の引用の中で、供給量の増加は市場価格から区別された彼の意味での交換価値の下落を引き起こすと主張しているが、もし金/銀や穀物についてそれが本当ならば、彼はそもそも経済の発展による労働人口の増加によって労働の価値が下落すると主張せねばならないはずである。それ故、労働の価値が真の価値尺度として一定不変である、というスミスの根本的主張はますます疑わしいものであると言わざるを得ないだろう。そして結局、以下のような甚だ曖昧かつ不明瞭な断定が価値概念に関するスミスの結論である。

従って労働が価値の唯一の正確な尺度であると共に唯一の普遍的な尺度でもあること、即ち様々な商品のあらゆる時、あらゆる場所の価値を比較することの出来る唯一の標準であることがはっきりと分る [1]。我々が世紀から世紀にかけて様々な商品の価値を、それと引き換えに与えられる銀の量によって評価することは出来ないということは認められている [2]。我々は年から年へもそれを穀物の量で評価することは出来ない。労働の量によれば我々はそれを世紀間についても年々についても、最も正確に評価することが出来る。世紀から世紀にかけては穀物は銀よりも優れた尺度であるが、それは世紀から世紀にかけては棟梁の穀物の方が等量の銀よりも同一量に近い労働を支配するだろうからである。逆に年々では銀の方が穀物より優れた尺度であるが、それは等量の銀の方が等量に近い労働を支配するだろうからである [9, pp.73-4]。

スミスのこの結論は、明らかに最初に立てられた価値の定義、つまりそこで価値が二つの異なる意味を持つとされていたスミスの価値概念からの殆ど必然の帰結である。彼の交換価値の概念は同時に使用価値という各々の商品（現代的に言えば財）に固有の価値（有用性）から切り離すことは出来ず、それらが商品の価値の共に無視し得ない二つの側面であるという主張から、この結論が極めて自然に導かれるのである。さらに彼の交換価値の概念は、それぞれの財に固有の一種の（それに含まれる労働量という）「属性」のごときものとして表象されている。これはつまり価値に対して何らかの「実体性」を想定することである。そして彼は労働はその価値が不変であるという意味で特別な財であると主張した。その結果、例えば穀物や金/銀などの財はその供給量の変化に伴って価値もまた変動するが、労働は不変の価値尺度としてその供給量（労働人口）の変化の如何に関わらずその価値は変わらない、という結論を独断的に主張することとなったのである。

周知のように、スミスによって初められた労働価値の概念は古典派経済学者たちによって引き継がれた。そして彼らの陥っていたイデオロギーを「自然主義的（あるいは経験論的）イデオロギー」と呼ぶことができるかもしれない。そのイデオロギーは「市場価値」などの本来抽象的な概念を認識するために、それを「労働」というより具体性を備えた観念に置き換えることによって価値それ自体を捉えようとする。それに対して限界効用に基づく新古典派の価値概念の本質は、それ自体は実体性を持たずにむしろ市場における「関係性」によって規定されるという点にある。新古典派の市場モデルで成立する均衡価格は、消費者の効用関数や所得の分布、また企業の生産技術等、与えられた条件のどれが変化してもそれに伴う需給の変化を通じて変わってしまう。つまり新古典派における市場価値（価

格)とは、財・消費者・生産者の相互の関係によって規定される、財(取引)の単なる交換尺度なのでありそれ以外の何ものでもない。こうして市場価値の概念が確定すると同時に、新古典派経済学は市場概念それ自体をも確立することになった。つまり「市場とは何か(何が市場を形成するのか)」という問いに対して、新古典派経済学は「市場とは、初めに財として与えられた取引の対象、効用関数と所得によって決まる消費者及び生産技術によって決まる企業から成るそれらの総体である」という市場の定義によって答える。現代的な意味での「市場の科学」としての理論経済学がこうして成立することになったのである。ここでもまた、アルチュセールの図式に従ってこの間の経緯を自然な仕方理解することができる。言うまでもなく労働価値説を一般性 I とし、それに実数値関数の概念とその微分計算という一般性 II が働き、その結果新古典派経済学が一般性 III として成立したのである。

#### 4 結論：経済学におけるイデオロギーとリアリティー

『天文学史』の叙述は、コペルニクスの仕事と彼以前の天文学者の仕事との間にまさしく「切断」と呼ばれるに値する目覚しい断絶が存在することを告げている。既に述べた通り、プトレマイオス天文学という一般性 I にピュタゴラス派による「中心火の回りを回転する地球」の考えが一般性 II として働きかけて、彼の理論が一般性 III として産出されたのであった。しかしその一般性 III は現実そのものを体現する真理と見なされることはできない。「切断」はさらにニュートン理論によって継続されたのである<sup>14</sup>。そのことは、アルチュセールのテーゼ(1)の言う「現実的な全体としてのイデオロギー」が、一回の切断によって全面的に取り払われることはできないことを示唆している。そこで我々は彼のテーゼ(1)を次のように補足(修正)する。

- (a) 固有のプロブレマティック(問題系)によって内的に統一されたイデオロギーは、認識論的切断によって再編されその意味を変化させるが、それを完全に消滅させることはない<sup>15</sup>。

<sup>14</sup>現代の我々はそのニュートンの重力理論でさえもが、非相対論的な理論としていわゆる「絶対時間・空間」のイデオロギーに囚われていたことを知っている。電磁気現象についての観察・理解が未だ十分ではなく、マックスウェル方程式が知られていない間はこのイデオロギーがヨーロッパの知的世界を支配していたのであった。それは、時間と空間が(実在ではなく)我々の認識の直感的形式である、と主張するカントの超越論的感性論の哲学的イデオロギーを生み出した。この哲学理論がイデオロギーであると言うのは、我々が一般相対論によって、時空多様体の計量テンソル  $g_{\mu\nu}$  は同時に重力ポテンシャルでもあることを学んだからである。この解釈はいわゆるニュートン近似において弱い静的な重力場に対するアインシュタイン方程式がラプラス(ポアソン)方程式に帰着し、そのとき  $g_{00}$  (正確には  $\sqrt{g_{00}} - 1$ ) がニュートン・ポテンシャルに対応する [5, p.63] ことから、棄却できない。従って我々は、時空とは紛れもなく重力現象を生じさせる物理的実在である、と結論せざるを得ない。そしてこの間の科学的経緯もまたアルチュセールの図式に従って、ニュートンの非相対論的重力理論を一般性 I として、それに特殊相対論と多様体上のテンソル計算という一般性 II が働いた結果、一般相対論が一般性 III として成立したと解釈される。

<sup>15</sup>このテーゼと次のテーゼ(b)は、あるいは既にアルチュセール自身が予見していたものかもしれない。少なくとも彼は、イデオロギーを統一する根源的な場としてのプロブレマティックの不可視性を見抜いていた。実際彼は「一般に哲学者はプロブレマティックそのものを考えることなく、プロブレマティックにおいて考える」と述べている [1, p.106、強調はアルチュセール]。しかし同時に彼がこれらのテーゼを言明できなかった理由は、彼が少なくとも [1] 出版時において、史的唯物論を最終的な一般性 III と見なしていたことであると思われる。

従っていかなる時代にもイデオロギーは存在し、我々はそうした「自分自身のイデオロギー」を通じて「現実」を見ていることになる。認識論的切断はそのようなイデオロギーを再編成し、それをより現実に近づけると想定（あるいは期待）されるのである。そのように想定する一つの根拠は、一たび切断が生じると我々はもはや以前のイデオロギー的編成（意味）に立ち返ることができなくなるからである。アルチュセールとともに我々は、

真理とはイデオロギー的なものをイデオロギーとして示してくれるものに他ならない [4, 科学者のための哲学講義第五講 p.884]。

と主張する。そしてテーゼ (a) から我々は、理論の中に現実がそのものとして現れることは決してないと結論する。「現実」とは、それ自体は決して認識の対象とは成り得ず、科学的な認識（一般性 III）が改訂されていくその果てに遠望される何かであろう。他方で、「イデオロギー」もまた理論の中にそのものとして現れることはない。イデオロギーは切断が生じた際に、事後的あるいは遡及的に過去の理論（認識）の中に同定されるのであって、イデオロギーそれ自体もまた認識の対象とはならない。「現実（それ自体）」や「イデオロギー（それ自体）」といった観念は少なくとも認識の対象として存在してはならず、従って哲学的（理論的）概念ではない。

ところで古典派経済学者たちの価値概念に対するイデオロギー的態度は、ケプラーやデカルトなどの自然哲学者たちが重力の働きを物体間の関係性としてではなく、「非物質的な力」や「微小物質」などの観念を通じて重力それ自体を理解しようとする試みと非常に類似している。しかしニュートン理論を知悉しているスミスには、後者のイデオロギー性は明白であったはずであろう。実際『天文学史』の叙述は、彼がケプラーやデカルトの宇宙論のイデオロギー性を深く見抜いていたことを裏付けている。つまり『天文学史』ではそれほど深い科学的認識に対する洞察を示していたスミス自身が、『国富論』では理論的基礎概念たる労働価値に関して同時代の（恐らくは J. ロックの影響の下に）支配的イデオロギーに囚われていたのであった。我々はこの事実をいわば貴重な教訓として、次のテーゼを提唱する。

(b) 人は自身のイデオロギーを見ることはできない。イデオロギーがそれとして見えるときには、それは常に既に他者のイデオロギーである。

しかしそれにも関わらず、何故スミスはケプラーたちのイデオロギー的な「理論」をあのようによくかつ肯定的な評価を与えながら紹介したのであろうか。それは古典派経済学を創始した A. スミスという道徳哲学者が、一つの科学を建設する際に克服しなければならない困難の性質を、自らの経験を通じて知り抜いていたからである。実際彼は『国富論』において自分自身をいわゆる重商主義のイデオロギーから解放したのであった。そのイデオロギーは、個人をその所有する金銭的富の多寡に従って富裕か否かを判断する仕方の素朴な類推によって、1 国の経済的豊かさをその国の保有する金・銀の量に従って判断しようとする。

[ある人が] 富裕になるということは貨幣を手に入れるということであり、要するに富と貨幣とは日常語ではあらゆる点で同義と考えられている。富者の場合

と同様に富んだ国とは貨幣が豊富にある国のことだと考えられており、また金銀をある国に蓄えさせることがその国を富ませる最も容易な方法だと考えられている<sup>16</sup> [9, II, pp.259–260]。

つまり科学を建設するあるいは実質的に発展させるとは、アルチュセールの意味での認識論的切断を行うことを意味するのであって、それは古い理論を拘束していたイデオロギーから理論を（同時に自分自身を）解放することなのである。スミスは自分の経済学における経験と同種の経験を天文学の発展の歴史の中に見出し、自己の経験と仕事の意味を確かめていたのだと思われる。

以上のことから我々は、イデオロギーの発展の原動力がイデオロギー自身ではなく、そのイデオロギーの担い手である個人であるというアルチュセールのテーゼ (3) の真意を知る。つまり一般性 I が一般性 III に変換され認識論的切断が生じるときに現実に変化するのは、イデオロギーではなく認識する自分自身である。我々は言うてみれば、認識以前の自分とは別の主体に変化することによって（以前の）自分のイデオロギーを見ることができるようになり、それによってより深く現実（あるいは社会）に接触するのである。我々はテーゼ (3) を次のように補足する。

(c) 認識論的切断は、それを行う主体が自分自身の理性を（認識論的に）創り変えることによって可能となる。

我々は経済学（社会科学）を自身の理性を改鑄するために研究するのである<sup>17</sup>。

この論考は、アルチュセールの三つのテーゼを擁護しながらそれを補強することによって自らのテーゼ (a) ~ (c) を提唱した。その過程で我々はやはりアルチュセールに負う認識図式と彼の認識論的切断の考えを援用し、それらを A. スミスの著作に適用することでこれらのテーゼを得たのであった。最後にこれらのテーゼの認識論的資格（地位）について一言述べて本論考を終えたい。

これらのテーゼはある種の現実について発言している。つまりそれらは、我々が認識という理論的实践において「現実に」行っていることは～である、と述べている。しかしテーゼ (b) によればこれらのテーゼ自身ももしイデオロギー的な命題であったとしても、我々にはそのことが見えないはずである。従って我々には、これらのテーゼの全てがイデオロギー的主張である可能性を否定できない。我々は一般性 III が改訂されていく過程を認識が現実に近づいていく過程として思い描いたが、最悪の場合には、これが全て錯覚である可能性すら排除できないだろう。それにも関わらずこれらのテーゼを捨て去ることが困難であると思われるのは、仮にいまここでただ一度だけ「現実」を「世界の真相」の意味に解釈するならば、この意味での現実の認識は全ての学問的探求者にとっての言わば「聖杯」であり、彼らの（我々の）生存の意味そもものだからである。

<sup>16</sup>ただしキリスト教イデオロギーとは違って、当時のヨーロッパ社会が重商主義のイデオロギー色に塗りつぶされていたわけではない。良く知られているように、当時ケネーに主導された重農主義のイデオロギーもまた存在したのである。スミスは「土地のみが生産的であり1国の富の真の源泉である」と主張するこのイデオロギーに対しても次のように批判の矛先を向けている。「しかしこの [ケネーによる] 体系の主要な誤りは、工匠と製造業者と商人たちを全く何も生み出さない非生産的な階級だとしている点にある [9, II, p.318]。」

<sup>17</sup>しかし一つの個別的な専門科学の中に閉じこもっているだけでは、イデオロギーから開放されることは難しいだろう。

## 参考文献

- [1] Althusser, L., (1965a) *Pour Marx*, La Découverte/Maspero, 『マルクスのために』河野健二他訳、平凡社 1994 年
- [2] Althusser, L., J. Rancière., P. Macherey., (1965b) *Lire le Capital*, Francois Maspero, 『資本論を読む』今村仁訳、ちくま学芸文庫 1996 年
- [3] Althusser, L., (1995a) *Sur la Reproduction*, Presses Universitaires de France, 『再生産について(上・下)』西川長夫他訳、平凡社 2010 年
- [4] Althusser, L., (1995b) *'Ecrits Philosophiques et Politiques I-II*, STOCK/IMEC, 『哲学・政治著作集 I・II』市田他訳、藤原書店 1999 年
- [5] Dirac, P.A.M., (1975) *General Theory of Relativity*, John Weiley & Sons, New York, 『一般相対性理論』江沢 洋訳、ちくま学芸文庫 2005 年
- [6] Kuhn, T., (1970) *The Structure of Scientific Revolutions*, University of Chicago Press, Chicago, 『科学革命の構造』中山茂訳、みすず書房 1971 年
- [7] Locke, J., (1690) *Two Treatises of Govvernement*, London, 『統治二論』加藤節訳、岩波文庫 1993 年
- [8] Marx, K., and F. Engels, (1845-6) *Die Deutsche Ideologie*, 『ドイツ・イデオロギー』広松渉編・訳、岩波文庫 2002 年
- [9] Smith, A., (1776) *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, London, 『国富論 (I~IV)』水田洋訳、岩波文庫 2000 年 (本文中のページ数は 1 箇所を除いて全てこの邦訳の第 I 巻からのものである)
- [10] Smith, A., (1795) *Essays on Philosophical Subjects*, London and Edinburgh, 『アダム・スミス哲学論文集』水田洋他訳、名古屋大学出版会 1993 年